

# 美しい国の持続的発展へ力結集

うま  
く  
に  
美  
し  
い  
国  
へ



高梨 雅明氏

(たかなし・まさあき) 東京農業大学農学部造園学科卒業後、建設省(現国土交通省)入省。都市・地域整備局公園緑地課長を経て官房審議官。退官後、都市再生機構理事などを務めた。日本公園緑地協会会長、NPO法人「美しい国づくり協会」副理事長。



進士 五十八氏

(しんじ・いそや) 日本学術会議会員(初代環境学委員長)。農学博士。東京農業大学長、福井県立大学長を経て、現在、高大名誉教授。福井県政策参与、NPO法人「美しい国づくり協会」理事長。紫綬褒章受章。



青山 俊樹氏

(あおやま・としき) 京大大学院修了後、建設省(現国土交通省)入省。河川局長、技監を経て事務次官。退官後、水資源機構理事などを務めた。NPO法人「美しい国づくり協会」顧問。

## 「美しい国づくり」対談・鼎談シリーズ

4

「美しい国づくり」対談・鼎談シリーズ最終回は、美しい国づくりの持続的発展に向けて、NPO法人「美しい国づくり協会」顧問で元国土交通事務次官の青山俊樹氏、同協会理事の進士五十八氏、副理事長の高梨雅明氏に語り合ってもらった。国土交通省が2003年に策定した「美しい国づくり政策大綱」は、それまでの経済・効率性重視の取り組みから、美しい景観に配慮した国づくり・地域づくりへの転換を促すきっかけとなった。地域しさがあって心地よく、美しい国づくりへの取り組みはまだ続く。

高梨 「美しい国づくりの持続的発展を展望する」をテーマに、これまでの取り組みを振り返り、今後の展望について鼎談していきます。03年7月に国土交通省が「美しい国づくり政策大綱」を策定しました。この政策大綱のポリシーの応援団として05年1月、NPO法人「美しい国づくり協会」を設立し、シンポジウムの開催や顕彰事業などの活動を展開しています。はじめに青山顧問に国土交通事務次官時代にまとめられた政策大綱について、どのようなお気持ちで取り組まれたのかをお聞きしたい。

青山 局長として赴任した東北地方建設局(現東北地方整備局)時代の経験が大きいです。11月初旬に福島県の奥会津地方を訪れた際、山が紅葉してしまっていて、あのスケール感に圧倒されました。京都は箱庭的な美しさですが、東北は「神々しい」という表現がぴったりでした。山形では紅葉の山の奥に白い雪が積もった月山が見えて、やはり神々しく、まさに舒明天皇が詠んだ「美しい国ぞ」

高梨 景観緑三法は、国土交通省はもとより、環境省や農水省なども含めて進めています。このことは大きな変化をもたらしたと思います。その国交省も発足から20年以上になりましたが、青山顧問はどのようにお考えですか。

青山 確かに国交省ができたのは、ものすごく大きな出来事だったと思う。私は、技監から3代目の事務次官になりました。最初

高梨 考えたのは、こんなに大きな組織をどういった次元でどういった方向にもっていくべきか、共通の目標設定はどうしたら良いかということでした。建設省と運輸省、国土庁、北海道開発庁それぞれ異なる歴史や文化があり、計画づくりの進め方も違っていましたから、何かしら軸をつ

高梨 自然災害から国土や生命・財産を守り、国民生活、経済活動を支えるインフラの整備に当たって、それ以前は景観や風景をいかに守ってきたこともありました。その

## 青山氏 人生、振る舞いに美しさ必要



福島県奥会津の紅葉

反省の念が政策大綱には込められていない。この姿勢はすこいですがね。青山 「衣食足りて礼節を知る」という言葉があります。これは最低限の状態だと思います。それで満足しては駄目です。美しさがあります。私の判断基準は美しいか否かです。その人の一生、ビヘービア(振る舞い)が美しいか美しくないかで見る。その人が、赤ちゃんと抱いた母親の顔はみんな美しいです。心の状態が表れていますから。こういことをみんなが感じ始め、お互い自分の足を元を見て自問自答する国になる必要があります。でもこれはなかなか難しく、人から言われてもそういって気持ちになりません。

高梨 美しさという新たな価値観、「心映え」でもって日々取り組んでいく。青山 美しさという新たな価値観、「心映え」でもって日々取り組んでいく。青山 美しさという新たな価値観、「心映え」でもって日々取り組んでいく。

## 高梨氏 「心映え」ある取組みに価値

果樹が植わっている姿が「園」という文字です。主に植物によりつくられたアメニティー空間を「園」と呼びます。日本庭園の技術の根本は、囲まれた空間を美しくする仕事という感覚が強い。しかし、囲った中で充足しているだけでなく、外界との関係をつくるために「借景」といって、遠近、上下の風景を生け捕りする手法を活用した庭園もあります。

高梨 進士理事長は、政策大綱や景観緑三法が登場するはるか前から、地域づくりの必要性を訴えておられました。この20年の動きをどう評価されていますか。

法の立法化に向けて携わりました。環境省や農水省にもご理解いただき、取り組みの幅が広がったことをうれしく思います。

進士 間もなく関東大震災から100年になります。震災復興で世界の潮流であった「都市美運動」や緑の都市計画を目指す造園学校、造園学会が誕生し、造園家は「風景計画」に携わっています。その後、横浜市では建築単体ではなく都市アーバン(デザイン)という言葉、土木分野では「景観工学やシビックデザイン」という言葉を使うようになりました。

高梨 景観を論ずる際に美しさを阻害するかどうかという捉え方が多かったです。美しさを「国づくり」「地域づくり」といった、もっと広い概念で考えたのが「美しい国づくり」であり、青山顧問の捉え方です。これが政策大綱で示された二つ目の大きな特徴です。また、これを推進していく過程で、行政的な課題・問題も絡んできます。これらを総合的に進めていく必要性、重要性を示しているのが、この政策大綱のもう一つの特徴だと思っています。

「美しい国づくり」の原点や視座を振り返ってきましたが、持続的な発展に向けて、NPO活動の方向性も考えるべき時期に差し掛かっている

## 進士氏 大交流時代の鍵は「ハート」

と思います。協会発足以来、長年にわたって活動をリードしてこられた進士理事長に今後の展開に向けて示唆やヒントがありましたらお願いいたします。

進士 当協会では「美しい国づくり景観大賞」という表彰制度を創設し、計6回実施してきました。これは本当に良かったと思います。理事や運営は造園家だけでなく、建築家や土木技術者、市民活動家などにも多大な支援をいただいております。ポスト・コロナの今後、インパクト(訪日外国人客)も含め大交流時代になります。その時に大事なものは「ハート」です。各地の市民が自分の足元の何が大事かを考えてほしい。当協会の活動表彰は、彼らにそのチャンスを提供するものです。あ

高梨 美しさを判断基準に満ち足りて心地よい国づくり、地域づくりを目指します。この「美しい国づくり」の理念を広めるために、NPO活動として力を入れるべき点について、青山顧問いかがですか。

青山 「日本」というのはすばらしい国だと、外国から来た人たちが思ってくれるような国にしていく必要があります。一方で、日本人は優しくない、親切だと言われたいら駄目だと思いがちです。一つひとつの小さなものに価値を見出し、敬つていこう、心を映す生き方みたいなものが、美しさの本質の一つの部分だろうと思っています。

